



平成22年度大学図書館近畿イニシアティブ基礎研修 「初任者研修」報告

著者	松本 和剛
雑誌名	関西大学図書館フォーラム = Kansai University Library forum
巻	16
ページ	59-62
発行年	2011-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/8146

平成22年度大学図書館近畿イニシアティブ基礎研修 「初任者研修」報告

松本和剛

平成22年6月24日(木)から25日(金)にかけて、表題の研修に参加する機会を頂いた。詳しい内容と、研修を経ての自身の所感を申し上げ、これを研修報告とする。

1 はじめに

この研修の主催団体である『大学図書館近畿イニシアティブ(略称『近畿イニシア』)』は、平成17年6月に近畿地区で発足した大学図書館の地域共同事業組織である。国立・公立・私立の大学図書館を網羅した協力組織として、設置形態の違いを超えて共同で事業等を実施するために設立されたもので、今現在、その関係大学は170大学にも上るとのことである。

組織の大綱を決定し活動の方向性を審議するため各設置母体から選出された10館からなる運営委員会と、具体的な事業を展開していくための2つの専門委員会として、能力開発専門委員会と広報・web専門委員会を設置している。その活動内容は、能力開発事業が現在の活動の柱となっており、能力開発専門委員会が中心となり近畿地区の大学図書館員の資質向上のために必要な研修等を実施している。また研修以外にも、加盟館との共催の形で大学図書館員向けの講演会なども随時開催しているとのことである。

(ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/initia/>)

今回参加した「初任者研修」は、近畿イニシア発足後、最初の試みとして始められ、図書館初任者に大学図書館の主たる業務、またその方向性等を包括的・網羅的に知ってもらおうという趣旨のもと実施されているものであり、近畿イニシアの能力開発事業の中でも特に力を入れている大きな柱の一つであるという。それを象徴するように、この度の研修の参加校数はそのほとんどが近畿地区4府県からだけであるにもかかわらず、実に40校以上にも上って

いる。これは近畿イニシアの事業規模が窺い知れる数字であろう。さらに、その参加者の内訳はというと、専任職員はもちろん、各館で雇用されている派遣職員まで実に多様な顔触れで構成されており、そういった面でも形態の違いを超えた広範囲な協力組織であることを強く認識させられた。

以下【表1】は近畿イニシアの組織構成図である。

表1 「大学図書館近畿イニシアティブ」
(近畿イニシア) 組織構成図
(平成21年6月1日～平成23年5月31日)



2 研修内容について

日程表【表2】の通り、大きく分けて6つの研修項目と講演、グループ演習が2日間にわたって行われた。その全てについて記載するには紙面が足りな

いと判断し、下記にそのいくつかの項目について抜粋し報告する。

表2 平成22年度大学図書館近畿イニシアティブ基礎研修「初任者研修」日程表

日付	時間帯	時間	内容
24日(木)	9:30~10:00	30	受付
	10:00~10:15	15	開会・主催者挨拶・運営委員、専門委員紹介
	10:15~11:05	50	研修1 資料収集業務 (大阪市立大学 島崎弘子)
	11:05~11:55	50	研修2 目録・分類業務 (神戸大学 菊池一長)
	11:55~12:25	30	参加者の自己紹介
	12:25~13:25	60	休憩
	13:25~14:15	50	研修3 閲覧・ILL・レファレンス業務 (大阪芸術大学 多賀谷津也子)
	14:15~15:05	50	研修4 雑誌業務 (大阪府立大学 武藤記子)
	15:05~15:20	15	休憩
	15:20~16:10	50	研修5 情報リテラシー教育 (関西学院大学 魚住英子)
	16:10~17:00	50	研修6 機関リポジトリ (大阪大学 土出郁子)
	17:00~17:30	30	大阪大学附属図書館見学会 (希望者のみ)
17:45~19:30	105	情報交換会(希望者のみ)	

25日(金)	10:00~10:10	10	開会・事務オリエンテーション
	10:10~11:50	100	講演「図書館業務で活用できるコミュニケーション能力を高める」 追手門学院大学 三川俊樹 教授
	11:50~12:50	60	休憩
	12:50~14:00	70	グループ演習1 (おすすめ方の説明を含む)
	14:00~14:15	15	休憩
	14:15~15:15	60	グループ演習2
	15:15~15:30	15	休憩等
	15:30~16:30	60	グループ演習3(振り返りを含む)
	16:30~16:45	15	講師による研修のまとめ
	16:45~17:00	15	閉会・事務連絡

i 資料収集業務

講師：島崎 弘子氏
大阪市立大学学術情報総合センター

図書館業務においては、閲覧、貸出、文献複写、レファレンスなどの利用者に対する直接サービス（パブリックサービス）と、目録データ作成などを含めた収書業務である間接サービス（テクニカルサービ

ス）の2つのサービスに分類される。ここでは、間接サービスの核となる資料収集について、またその資料収集の核となる選書業務を中心に講義が進められた。

まず、収書基準、選書方法、選書ツールなどの基本的かつ具体的な説明を、大阪市立大学学術情報総合センターでの資料収集の現状に沿ってお話いただき、講義は今後の課題へと話が及んだ。

分野別選書体制の強化や学生選書の導入、またe-bookなど、多様化する媒体への対応・有効活用を課題として挙げ、大いに検討すべき事項として参加者にもその必要性を訴えていた。

まとめの部分では、

- ①「館」としての選書体制を構築する
- ②常に具体的なイメージをもつ

この上記2点を心掛けることで、利用者のニーズに沿った収書を可能とし、より質の高い間接サービスを提供できるのではと締めくくり、講義は終了した。

ii 閲覧・ILL・レファレンス業務

講師：多賀谷 津也子氏
大阪芸術大学図書館

下文は講義冒頭の説明で引用された、図書館の意義からの一部抜粋である。

『図書館こそは、人類の過去と現在を結びつけ、国や地域の違いを超えて、人と人とを結びつける「黄金の鎖」である』（図書館ハンドブック第6版 2005 日本図書館協会発行 より）

この意義を、直接サービスとして体現しているものが閲覧・ILL・レファレンス業務である。図書館の顔とも言われ、館（大学）のイメージや評価にも繋がる重要なポジションを占めるこれらの業務においては、細やかな注意が必要であると喚起された。

例えば、利用者対応ではいつでもwelcomeの姿勢を取り、無知の知をもってして業務を遂行しなければならないし、ILL業務では常に資料共有化の理念と相互扶助の精神を理解したうえでのマナー遵守が必要不可欠であることなどが挙げられた。

iii 雑誌業務

講師：武藤 記子氏
大阪府立大学 学術情報課

この講義では、和雑誌、洋雑誌、電子ジャーナルに分類して、それぞれ選定方法や契約方法、支払、受入から製本までのフローなど、大阪府立大学（以降、「府大」とする）の現状を実例として具体的に聞くことができた。また、府大では雑誌業務に多大な力を注いでいるらしく、なかでも、電子ジャーナルについては『学術情報基盤の最大の要』と捉え、タイトル数が大幅に増加していることなどから、冊子体からの移行には本腰を入れて取り組んでいるという印象を強く受けた。また、冊子体雑誌、電子ジャーナル共に悩みの種となっているのが継続的な価格の上昇であり、これは雑誌業務に携わるうえで避けては通れない問題である。このことが購読の不確実性などに繋がることは、当館を含め多くの大学図書館、専門図書館でも非常に危惧されている。しかし、府大では電子ジャーナルタイトルの見直しを抜本的に行うことで選定に尽力し、さらに入札制度を活用したことにより、実質的な購入価格の上昇がほとんどないとのことだった。

その他にも、学部生、院生、教員に対して電子ジャーナルの利用講習会を出前で実施するなど、大変意欲的な取り組みを聞き、学生数等の規模の違いや組織構成など、一概に単純比較はできないが、わが図書館でも学ぶべきところ、参考にすべきところが大いにあるのではないかと、感心させられる講義であった。

iv 情報リテラシー教育

講師：魚住 英子氏
関西学院大学図書館

- 情報リテラシーの概念
- 大学図書館員の情報リテラシー教育への参画
- 大学図書館サービスの生命線

はじめに、この講義のアウトラインが上記3点のように示された。そして、大学図書館の置かれている環境、またその業務の性質上、情報リテラシーの重要性を認識するのが早く、利用教育の取り組みについても情報リテラシーの必要性が叫ばれる前から既に実践していたことを根拠に、「情報リテラシー教育は、情報の宝庫である大学図書館がすべきこと」という主張を展開し、講義は進められた。

また講義では、近年の大学図書館は、静謐かつ重厚なイメージからカジュアルなイメージへ変化し、

図書館員は「本の守役」から「navigator」へと移行しているのではないかという指摘があり、その果たす役割も非常に多様化していることを認識させられた。

そのような、大学図書館を巡る大きな流れの変化のなかで、実際に大学図書館はどのようにして教育の場へアプローチしていくことができるのか。講義では、『図書館利用教育ガイドライン—大学図書館版—』における領域1～領域5（※）にかけて、実際に関西学院大学図書館の取組み例を挙げた説明がなされた。詳しい内容は割愛するが、新入生へのアプローチとしての図書館ガイダンスや、演習単位の文献探索講習会など、わが図書館でも同様に実施しているような取組みの紹介がほとんどで、斬新さや驚きを感じることはできなかつたのは少し残念だった。

（※参考）

- 領域1：印象づけ
- 領域2：サービス案内
- 領域3：情報探索法指導
- 領域4：情報整理法指導
- 領域5：情報表現法指導

日本図書館協会利用教育委員会編
日本図書館協会 2003

v 講演&グループ演習

「図書館業務で活用できるコミュニケーション能力を高める」

講師：三川 俊樹教授
追手門学院大学

研修2日目の午前から正午にかけて表題の講演が行われ、また午後からは参加者全員参加でのグループ演習が実施された。学生との個別対応に際して、現状抱える問題や課題、またその改善方法や技術的なアドバイスなどを、図書館の利用者対応業務、主にレファレンス業務を想定して心理学的見地からご指導いただいた。しかし、講演、演習内容ともに、いわゆるカウンセリング的要素が強すぎた面があり、実際の業務に結びつけるのが困難ではないかと感じる点も多々あった。ただ、専門的なコミュニケーション技法については、今後適当な場面で試してみたいという気にもさせられたし、図書館業務で活用できるかできないかは個人のスキル・テクニック次第

ということだろうか。

一方で、参加者を混ぜこぜにしてグループ演習が行われた点は良かったのではないかと考える。様々な機関から集まった参加者同士が、演習を通じ意見なり疑問なりを互いにつけ、共有し合えたという経験はとて有意義なものであった。講師の方が驚くほど実に色々な意見が出てきたのも、初任者ならではの新鮮なアイデアを土台としているものであり、これも近畿イニシアならではの貴重な研修項目であったと感じる。

vi 大阪大学附属図書館見学会

今回の研修で個人的に良かったと感じた点が、研修1日目の最後に希望者のみとして、大阪大学附属図書館総合図書館の見学がスケジュールに組み込まれていたことである。建物の外観、内観ともに洗練されていて魅力的だったが、それ以上に取り入れているシステムが非常に興味深かった。

『ラーニング・コモンズ』は図書館の中において、会話やグループ討議を行うことが可能な斬新な空間であった。もちろん、そこには紙媒体資料があり、パソコン上でデータベース、電子ジャーナルが利用でき、図書館としての機能は十分に果たしている。その上で、『学生同士が互いにコミュニケーションを取り合い、共に考え、ディスカッションし、学ぶ場』と位置づけられ、机や椅子を自由に移動でき、ホワイトボードを利用するなどして、ゼミの授業などに使われる。設置当初は、大学側が意図する空間になるのか懸念もあったそうだが、現在は特に問題なく運用できているとのことであった。モダンなデザインということもあり、学生にとっても魅力的な空間なのであろう。

また、それとは対照的に『サイレントゾーン』なる空間があり、そこでは話し声はもちろん、タイピングの音さえ排除するためパソコンの持ち込みも禁止するなど、まさに徹底されていた。

そして、監視カメラとその映像を映し出す大きなモニターが図書館のあちこちに設置されており、盗難防止と安心感を得るのに、一役も二役も買っている印象を受けた。

そのほかにも、『携帯電話用ブース』、『ペットボトル専用自販機』などもあり、学生の声に応えながら、いわゆる棲み分けが全面的になされて、それが成功している先進的な図書館であると感じ、感心さ

せられた見学であった。

3 まとめ

この研修に参加した大きな目的として、担当業務以外の業務の網羅的な把握が前提にあった。担当である収書業務については、普段からのOJTで日々必要な知識を習得しつつあるが、それ以外の業務となると習得する機会がないのが現実であった。そのようななか、今回の研修では特に閲覧・ILL・レファレンス業務について、その基本と実務の内容理解に努めようと心がけ、講義に臨んだ次第である。

「収書業務であるテクニカルサービスだけでは図書館たりえない。収集した資料は利用するためのものであり、利用者が資料を有効に利用できるよう十分にサポートしてはじめて、図書館は図書館として機能する」という意義のもと、閲覧・奉仕業務であるパブリックサービスは成り立っている。今回の研修で、そういった意義や実務について少ないながらも有効な知識を得て、また収書業務についても俯瞰的、かつ具体的に改めて見直すことができ、収書業務と閲覧業務との図書館業務全体における相互の必要性と連関性を見出すことができたと感じる。それぞれの業務が歯車のようにしっかりと噛み合せて初めて、利用者に乗せた図書館という快適で大きなバスが潤滑に動き出すイメージを描くことができた。今後、その歯車を構成している一員である自覚をしっかりと持ち、バスを止めてしまうことのないように利用者満足を追求して仕事に取り組みたいという気持ちになった。

なお、この初任者研修において、現代の大学図書館ではもはや欠かせないものになった（のではないかと考える）、広報関係や図書館運営体制などの話や今後の在り方などを説明いただく講義が加われれば、大学図書館業務のさらに包括的な知識を網羅できるより良い研修になるのではないかと感じた。

図書館業務における初めての学外研修であったが、学ぶところ、感じさせられるところが多々あり、大変充実した新鮮な2日間となった。このような大変有意義な経験ができた機会を提供してくれた近畿イニシアに心から感謝したい。

(まつもと かずたか 図書館事務室)